

◆書評◆

上間陽子著

『裸足で逃げる』

沖縄の夜の街の少女たち』

(太田出版 2017年 ISBN: 978-4-7783-1560-3 1700円+税)



林 美子

(お茶の水女子大学大学院 ジェンダー社会科学専攻、ジャーナリスト)

JK ビジネスや援助交際など、若い女性たちのセクシャリティーにかかわるふるまいが耳目を集めるようになって久しい。それらの行動は多くの場合、女性や少女たちの「無責任さ」や「金欲しさ」といった文脈で語られる。実際には彼女たちはどのような人物で、それらの行動の背後には何があり、彼女たち自身がどのように考えているのかが表に出ることはほとんどない。なのに目についた行動だけで女性たちの「自己責任」や「自由な選択」の結果であると判断し、本人やその家族という個別の存在が抱える問題に帰着させ、少女の補導といった対応でよしとする。そんな空気がこの社会に蔓延してはしないだろうか。

本書は、沖縄出身の教育学者で、現在琉球大学教育学部研究科教授である著者が、沖縄の風俗産業で働く女性たちから聞き取り調査をした結果をまとめたものである。本書の独自性は、登場する女性たちが、著者の研究対象であるにとどまらない存在として描き出されていることにある。

子どもや女性への公的・私的な支援者の立場をあわせもつ著者は、調査と支援との間を行き来する。いや、調査と支援とが重なり合い、同じ時間と空間の中を同時進行していくさまを、そのまま文字に落とし込んでいる。だから何度も、著者自身が文中に登場し、著者と女性との会話がそのまま書き留められる。それを、女性をとりまく人間関係や社会的な状況の中に、一つひとつ位置づけていく。

そのことにより本書は、登場する6人の女性たちの生き方、今そこに身を置いている生活と、彼女たちをとりまく家族、友人、職場、地域社会のありようを、明確な輪郭をもって浮き上がらせることに成功した。それは読み手に確かな共感をもたらす。筆者が研究者と支援者の二つの視点を保ちつつ、分別できない自分自身として女性たちと向き合った結果であり、相手と行動をともしながら理解を深めていくエスノグラフィーのさらなる可能性を感じさせる。

調査は、沖縄の暴走族の実態に詳しい研

究者と共同で、日本学術振興会のファンドを得て2012年から2016年まで実施した。まず、キャバクラの店長にそこで働く女性たちを紹介してもらい、そこからさらに紹介を受けて調査対象者を広げた。著者は女性たちが指定する場所に出向き、ICレコーダーを回しながら話を聞き、音声データをすべてトランスクリプトに起こして本人たちに確認してもらった。全員ではないが、本人を前に原稿を音読して意見や感想を聞き、一緒に仮名を考え、プライバシーの観点から削除・変更箇所を決めた。

このような過程を経て、本書に登場するのは20歳そこそこの6人の女性たちである。そこには、親からの養育放棄、家族による暴力、若年出産、恋人からの激しい暴行、レイプ、中絶、援助交際と、女性たちが経験する様々な困難が、時には調査と同時進行の形で描かれる。

彼女たちの置かれた状況には共通点が多い。6人のうち5人は生まれ育った家庭にネグレクトや暴力などの問題があった。5人は何らかの形で身体への暴力を受けたことがあり、そのうち3人は夫や恋人からの暴力だった。集団レイプの被害を受けた人が1人、援助交際の客からの暴行が1人である。10代での出産や中絶を5人が経験している。

そして、貧困。その言葉自体は本書にほとんど出てこないが、貧困は生まれ育った家庭が抱えた困難であり、現在の困難でもある。学歴も資格もなく、様々な傷を負った彼女たちが、子どもを養いながら働ける場は限られていることが、女性たちの語りを通

して描かれる。本書はセックスワーク論を含めた仕事の分析には踏み込んでいないが、本書の語りの先には「選択肢があらかじめ狭められた状況で働いていることを自己責任と言ってよいのか」との問いが浮かぶ。さらなる展開が期待できる論点である。

著者が支援者として現れるのは、たとえばこんな場面である。女性の一人に付き添って、中絶の相談をするため病院に行く。担当の医師(女性)に自分は血縁者ではないと著者が告げると、医師は「自分のお母さんには話せないんですか?」と女性を咎めた。さらに、「子どもはだれの子どもですか?」と聞いた。この医師は「くそ最悪」だったと、ネット上の評判を引用しながら著者は書く。

女性は、集団レイプの被害者である。レイプ事件のあと50人以上と性体験を重ねたという。ジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』(みすず書房、1996年)を参照しつつ、著者は、頻繁な性交渉は「(レイプ時に)味わった恐怖を無化し、奪われたコントロール感覚を取り戻すため」(161頁)の行動であると述べる。そして、彼女に「ずっとがんばって暮らしていること、ほんとうはまだ子どもであること、だからもっとゆっくり大人になっていいはずだ」(166頁)と声をかけたかったと書く。「もっとゆっくり大人に」という言葉に、著者の思いが詰まっている。

著者は、女性の家族や恋人にも話を聞いている。周囲にいる男たちの暴力性は、非常に深刻だ。そこに、先輩を絶対とみなす沖縄の「レージャー(先輩)・うっとう(後輩)」文化の存在を著者は指摘する。先輩から暴

力を振るわれ、自分が先輩になると後輩に暴力をふるう。恋人や家族にも暴力をふるうのは当然と思い、殴られるほうも「大切にされているから暴力をふるわれている」(78頁)と思おうとする。

本書では、米軍の存在はわずかしか出てこない。著者は、「米軍基地のフェンスに囲まれた、大きな繁華街のある街で大きくなった」(11頁)という。そこは、今回の調査を行った場所でもある。子どもの頃の友人、家出をしたり知らない男とセックスしたりした少女たちのことを思い浮かべつつ著者は書く。「私たちの街は、暴力を孕んでいる。そしてそれは、女の子たちにふりそそぐ」(15頁)。

支援機関の問題も深刻である。前述した医師に限らない。恋人の暴行を受け警察に駆け込んだ女性を、入籍したカップル以外は保護対象ではないといって警察官が追いつ返す。市役所の担当者は生活保護を拒絶し、社会福祉協議会も支援の手を差し伸べない。

一方で、沖縄の教育界では家庭に「早寝早起朝ごはん」を推奨する運動が起きていることに、著者は注意を促している。全国学力・学習状況調査で沖縄県が最下位になったことへの対策だとされるが、学力と経済

格差と「早寝早起朝ごはん」の関係が十分調査されたわけではない。個々の家庭の問題に矮小化して本当に必要な支援を提供しようとしめないことへの危機感が漂う。

女性たちはその後、結婚したり、資格を取って看護師になったり、いまもキャバクラで働いていたり、それぞれの道を歩んでいる。中には連絡の取れなくなった人もいるという。それでも、著者との交流が女性たちのエンパワーメントにつながった面も少なくないことが、本書から読み取れる。つらい描写が続いた先に、そんなエピソードがあるとほっとする。

最後に、著者が採用した手法の有効性について一言付け加えたい。本書は、読み手に共感呼び起こすことに成功した。それは、著者と調査対象者との深い共感がもたらしたものだ。では、共感できないような人たちが調査対象である場合にも、この手法は有効なのだろうか。本書に関していうと、女性たちについての理解は深まったが、暴力をふるう側の男たちの存在は、まだ謎のまま残っている。だが、暴力について考えるとき、暴力を加える側の調査や分析も欠かすことはできない。今後の研究の進展に注目したい。

(掲載決定日：2018年4月4日)